

タラノメ栽培の実証の取組み

岩手県水沢地方振興局林務部

主任林業改良指導員 土野 恵美子

1 取組みの背景

岩手県では、特用林産はしいたけが主要産物であるが、現在は自然食が見直され、多種類のきのこ、山菜が注目されるようになってきている。その中でタラノメは山菜の王様と呼ばれ、多くの人に人気のある山菜種である。

タラノメは、県内であまり栽培事例がなく、当地域でタラノメの栽培が可能となると、農林家の複合経営の一作物として安定した収入を得られることが予想できることから、栽培技術の実証に取り組んだ。

2 栽培方法について

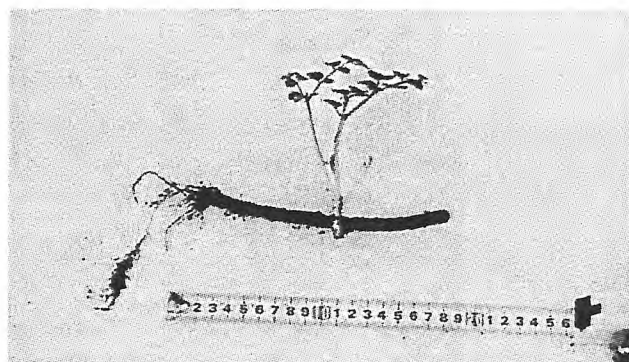
タラの木の増殖は、既存のタラの木から根（種根）を採取し、畑に移植することにより行なわれる。

種根は4月上旬に採取し15cmに切断、施肥及びマルチを設置した畑に植栽する。1年目は幹が30cmほど成長し、タラの木の株が形成される。

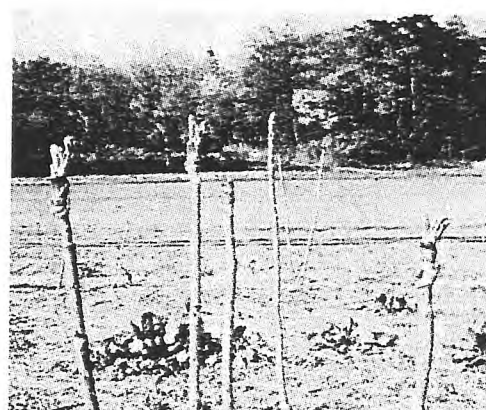
翌春は幹を台切りし萌芽整理すると、株から発芽した芽が秋には樹高およそ2mのタラの木に生長するので、伐採し促成栽培ができるようになる。3年目以降は同様の管理を行い、毎年タラの木を伐採する。

この生長した木（穂木）を伐採し、ビニールハウスで促成栽培（ふかし栽培）することにより、旬より早くタラノメを発生させ収穫することができる。

促成栽培は、ビニールハウスの中に水耕栽培の装置を作り、タラの木を葉の付け根にある芽ごとに切断（10～15cm）し装置に設置、電熱線等により温度管理を行う。約1ヵ月で芽が生長するので、1月から4月の間に1つの装置で3～4回収穫ができ、計画的に促成栽培することにより、冬期に安定的なタラノメの出荷が可能となる。



植栽後1ヵ月の種根



タラの木

3 実証試験の内容と結果

(1) 穂木畑について

畑においては、タラノメの種根の大きさ（直径）による発芽生長の比較、マルチの有無及びマルチの種類の比較を行った。

種根の直径の比較については、直径の大きいものほど発芽及び生長が良好である傾向が見られたが、5mm未満の直径の小さなものは発芽率が2割程度と不良な結果となったので、種根の採取においては直径5mm以上の種根が有効であることが確認できた。（図-1）

マルチの有無については、発芽及び生長に大きな相違は見られなかったが、雑草防止のためにはマルチが必要であることが確認できた。

マルチの種類別については、黒ビニールマルチ、白ビニールマルチ、紙マルチ、稲ワラを敷き詰めたマルチの4種類を比較した。その結果、黒ビニールマルチが発芽率8割程度と最も良好で、他は5割程度と不良となった。

(2) 促成栽培について

促成栽培を実施した結果、穂木が大きいほどタラノメが大きく栽培日数が短い傾向が見られ、樹齢の若い株の穂木ほど芽の生長が早く栽培日数が短い傾向が見られた。また、発生までの日数が長くなるほど、穂木や芽に腐れが発生しやすくなる傾向が見られた。

以上のことから、大きな若い穂木ほど良好なタラノメが収穫できる結果となったので、販売に有利なタラノメを発生させるためには、畑において生長の良い良質な穂木を作ることが重要となる。

4 考察

このようにタラノメ栽培を実証した結果、当地域における有効な栽培方法を確立することができた。今後は、さらなる技術の向上、作業の効率化を追及し、安定した生産体制を確保できるよう研究を続け、また、地域農産物の1品目として定着するよう地域に普及したい。

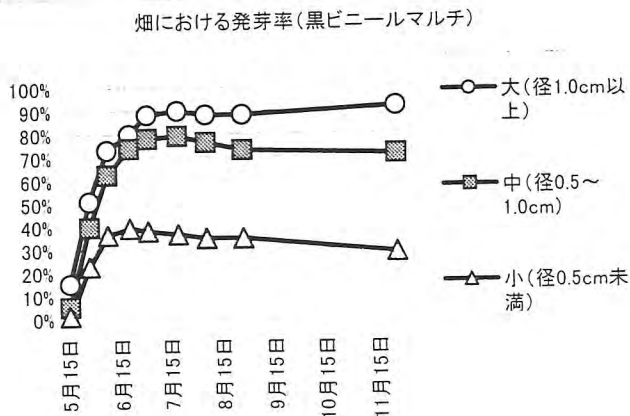
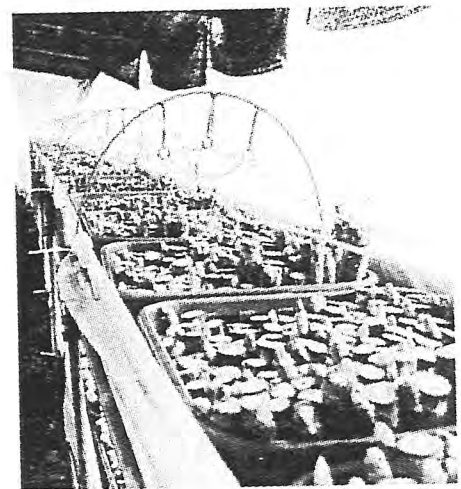


図-1



促成栽培